

(④から続く)

大熊：これから質問タイムに入りたいと思います。

谷田さんのメッセージは先ほど佐藤さんが読んでくださったんですけども、少し谷田さん何か付け加えてくださいますでしょうか。

谷田佳和子（みわこ）さん：今、特にはないそうです。

大熊：奥様のお言葉をひと言お聞きしたいというメモが入って参りました。

佳和子さん：このたびはこのようすばらしい賞をいただき本当にありがとうございます。娘が東京の大学に進学しましたので、今日は息子と3人で来まして、このあと娘と待ち合わせをしております、図らずも家族旅行になっております。またこのあと何かありましたら。



中央が谷田佳和子さん。マイクを持っているのはご息子

大熊：鴨下さんのご家族はいらっしゃいますか？

佳和子さん：鴨下さんも今日、息子さんと一緒に。

大熊：さきほど佐藤ディレクターがうつしてくださった「さわり集」の映像中で、閉じ込められ症候群の旦那様について、「遺影になってしまったら歳をとらないけれど」おっしゃったお二人です。何か補足することがありましたらどうぞ。

■番組を評価していただいて、「がんばれがんばれ」とエールをいただいたような感じが



鴨下章子さんとご息子の俊也さん

鴨下章子さん：ダイジェスト版を観まして、改めて思ったことは、皆様に番組を評価していただいて、「生きることだ、がんばれがんばれ」ってみんなにエールをいただいたような感じでした。やっぱり、うちの主人が生きていてくれて、すごくよかったなと改めて思いましたので、家に帰りましたら、必ずこの、大変な賞をもらったことと、応援してくださっている皆様のことを伝えたいと思います。ありがとうございます。

(拍手)

大熊：ALSの方はまず人工呼吸器を着けて生きるかどうかで大変な決断を要します。それを谷田さんは乗り越えられたんですけども、次に、眼も動かない、手も動かない、世の中と何も交流できなくなってまで生きるかどうかというところで、とても悩まれます。その答えを、鴨下さんのところで見つけられたのですね。

それではせっかくの機会ですので、透明文字盤で、答えてくださいますので、ご質問どうぞ忌憚のないように、どんなことでも結構です。あとの懇親会があるのであまり長くは伸ばせませんので、早い者勝ちです。どうぞ。

ジャーナリストがウヨウヨいらっしゃるわけですから、何か質問はないでしょうか。ちょっと目が動いたNHKの鈴木さんなどはどうでしょう。テレビの番組をつくっていらっしゃる方です。

鈴木紀郎さん：NHKのOBの鈴木です。谷田さんにお伺いしたいんですけども、プロデューサーの立場であり、出演された方としてですね、この作品をご覧になって、佐藤さんの作品をどのように評価されていますでしょうか。

大熊：なるほど。

谷田佳和子さん：(文字盤を読む)：よく、まとめた。葛藤の部分がよかった。

鈴木さん：今度逆に佐藤さんにお伺いしたいんですけど、お医者さんは自分の身内を手術するとか、そういうのは非常にしにくいということを聞くんですけど、ディレクターとしてですね、自分の上司を取材対象にして番組をまとめるというのはどういう気持ちだったのでしょうか。

佐藤さん：先ほど、番組の企画したきっかけについて少しお話したんですが、いたく個人的な気持ちでスタートはしたんですが、いざ、始めてみるとですね、正直申し上げまして、先輩後輩の関係でもありますし、相当病気が厳しくなってくる精神的な部分もございまして、相当激しい葛藤がありましたよね。かなり厳しい局面も、人間関係の上でもありましたけれども、まあ、やっているうちにお互いの気持ちがわかる部分が、同じ仕事をしていたという部分がありますので、そこはなんとか乗り越えられたのかなということですね、結果オーライだったかなということしか言いようがないです。



佐藤泰正さん

■葛藤、そして感謝

大熊：具体的に言うとどういう葛藤ですか。

佐藤さん：えーとですね、こちらの取材意図が理解してもらえるかどうか、受け入れてもらえるかどうかみたいなこととか、あとはコミュニケーションが、取材を始めた当初からそんなにスムーズでは、肉体的な問題ですが、なかったものですから、そこで行き違いが生じたりですか、そういうふうなことで、けんか寸前とまではいきませんでしたかね、相当もめたといいますか、そういうふうな時期もありました。

大熊：もめたといえば、テレビの中でも、奥様が最初、「仕事をこんなになってまで持ち込むの？」と腹を立てたという、それはどういうふうに変わっていったのでしょうか。

佳和子さん：私は、主人が仕事を持ち込んだとは思ってなかったんですけど、番組になったときに、佐藤さんが、どうも奥様は仕事を家庭に持ち込んだのではないかと感じておられるのではないかとこの形で（笑）。私の気持ちとしては、最初はそういうふうには思っていなかったんです。

葛藤があったっていうのは、主人は呼吸器を着けて生きる方を選んでいますが、私としては、そういう生き方を、番組が前面に押し出して応援してくれるのかなと思ったんです。けれども、佐藤さんのお気持ちとしては、つけない方が8割いらっしゃるということで、そちらの方のお気持ちというか、そういったことも、本当に半々ぐらいの形で出したかったようなんですね。

そうすると、主人が生きているっていうことがなんだか否定されたような、私としてはそういう気持ちがありました。それで、あの番組の中で、怒りを感じたという表現になっていたんです。葛藤、どこまでを、どういった番組にするか。

で、今回本当に佐藤さんはよくまとめられたなと思いましたのは、やはり、観ている方に、なんと言いますか、キャッチボールを投げて、そして考えてくださいという形で、脚本も金杉先生と一緒に本当に一生懸命考えてくださいました。今、振り返ってみると、主人が、佐藤さんっていう後輩に恵まれて、このような、病気になっても全社を挙げて応援してくださっている。「あ、谷田さんどうしてるかな」って、いうふうに、同じように感じてくださった。私も仕事をしていますので同僚の方が病気になられても、なかなか何かするっていうことが、実行に移すっていうことができないでいます。それを実行されたというところが、本当に。

夫婦で話すときには「佐藤さんありがたいねえ」って言ったら涙がわーって出てくるんですけど、主人が。そういうところも表面的にはなかなか恥ずかしくて言えなかったりしました。

今日も佐藤さんお一人でも、いらっしやれたと思うんですけど、お礼の意味もありまして、来させていただいております。この場をお借りして、ありがとうございました。



大熊：ありがとうございました。
(拍手)

大熊：佳和子さんは高等学校の先生でいらっしゃるので、今日は休みをとっておこしくございました。この時間ではもうお帰りになれないので、一晩お泊まりになります。そういう犠牲を払ってここへ来てくださいました。先日、わたし、毎日新聞に、「イクメンが日本を救う」というコラムを書きました。その記事をお送りしながら、「人司さんはイクメンだけど、仕事人間で、イクメンではなかったのでは？」っていうメールを送りましたら、佳和子さんから「彼はイクメンでした」という弁護をするメールが届きました。朝ご飯は必ず人司さんがおつくりになったということでした。うなずいておられる丹羽さんは、千葉の方のイクメン同盟の方であります。

他にどうでしょうか。もうあと一問くらいで隣にいかないかと、せっかくのごちそうが食べられなくなっちゃうという、切羽詰まった状況にあります。

どなたか。文字盤を使って答えをしていただくなんてチャンスはめったにないので、もったいないですから。

大熊：下野新聞のみなさま、これだけ幅広く取材なさって、矛盾に突き当たったり、壁に突き当たったりということはありませんでしたでしょうか。

■気づいただけでもだめ、実体験を伴わないと難しい

山崎さん：すいません、ちょっとすぐに思い浮かばないところがありますけれど、実は、連載と並行しながら、地元の宇都宮大学と連携をして公開セミナーを私たちが講師になってやったんですね。そのときにやはり関心のある方が、60代70代くらいの方が多かったんですけど、聞きにきてくださって、先ほどお話したような在宅ケアのお話なんかをすると、そうだよな、そうですねって聞いてくれて、少し気づきにつながられたのかな、なんて、お話をしながら思ったりすることもあったんですけど、その中で多かった反応というのが、終わったあとに、いやーいいねえ、ああいうのができるといいねえ。でも自分には無理だね。っていうことがあったんですね。

やっぱりその、なんとなく頭では分かっても、在宅っていうところに落ちていかないっていうですね、やっぱりこれは過去の経過といいますか、そういうことがあったりとか、たとえばそれで60代70代の方が、実は病院で、誤解を恐れず言えば、あまり満足できる形じゃなく、親を看取っているとか、そういうことが自分の体験にあるために、次の発想の転換の邪魔をするのかなとかですね、そういう意味では意識の変化ってというのは、気づいただけでもだめだし、どこか実体験を伴わないと難しいのかなということを感じました。私自身これをやって思ったのは、「在宅医療で豊かな時間を過ごせてよかったね、幸運だったね」っていう感じが、数年前までは少なくともあったと思うんですけども、これから先は、望んだら、望む人がいたらすぐできないと、その人が不幸になっちゃうかもしれないよ、できないと大変なことになるよっていうぐらいの気持ちがないといけないんだろうなと思いますけれども、なかなかその意識の変化ってというのは一朝一夕にはいかないというようなことを実感したということです。すみません、ありがとうございました。

大熊：これはコンボの活動にも通じるかもしれませんね。表紙に写っている方たちは幸せそう、よかったね、で終わらずに、そうできないとしたら、それは、

■一步を踏み出すということが、すごく大事

丹羽さん：表紙モデルになる人は、撮影の時にコンボさんのおかげでこんな場をつくってもらってありがとうございますとよく言われるんですけども、そのときに私がよく言うのは、いやでも一步を踏み出したのは自分自身なんではないですかということをよく言うんです。つまり表紙に出てみたいという思いがあって、そして応募をするというプロセスがあるわけです。応募をしなれば、こちらがこういう方がいるんだということで、じゃあこの人を次に表紙にお願いしようということにはならない。

そういう一步を踏み出すということが、私たちはすごく大事だと思っていて、『こころの元気+』を読んでいる読者のはがきの感想ですごく多いのが、勇気をもらえましたってというような言葉がすごく多いんですけども、一步を踏み出すそういうものってというのは、どんな人であってもですね、何か心がめげてし

まったような時っていうのは、一步踏み出せなくなってしまうんですけども、そういう、一步踏み出せないような社会ではなくて、どんなことがあっても前へ進める、で、前へ進むだけだと疲れてしまうので、そこに踏みとどまってもそれはそれで、オッケーだし、そんなような社会であるといいなということを思っています。



■チャレンジ精神とユーモアと

大熊：ありがとうございました。これまでは推薦した方にお立ちいただいてまいりました。ただ、コンボの推薦者は、太田美智子さんというライターで、今イタリアに行っています。日本は世界の中で桁外れに精神病院のベッド数が多く、統合失調症の方だけではなくて認知症の人まで閉じ込めちゃうという日本。一方、精神病院をなくしてしまったイタリアは、どうなのかというふうに調べに行っておられます。

本日受賞なさってここにお上がりになった方たちは、チャレンジ精神に富んでらっしゃって、社会にインパクトを与え、しかもユーモアも忘れない。我々医学ジャーナリストの鏡、私たちにとってはお手本だなあと、尊敬させていただいております。

おとなりの部屋に設けました懇親会で用意いたしましたお食事が冷めてしまいますので、とても心残りですけれども、ここで一旦閉じさせていただきます。

総合司会・杉元順子：長時間にわたって大変充実した、授賞式が催せましたこと感謝申し上げます。

わたくしどもにとって初めての試みですので、どうなることかと思いましたが、みなさまのおかげで、このような感激に満ちた授賞式が行えましたことを大変ありがたく存じます。これからも医学ジャーナリズム、医療のジャーナリズムおよび福祉ジャーナリズムの発展のために、ぜひご協力いただけたらありがたいと思います。みなさま、本日は本当にありがとうございました。 (拍手)



懇親会で「タバコやんなっちゃった節」を披露してくださった渡辺文学さん



カナダの科学ジャーナリスト協会からもお祝いが